

日本薬学会第 133 年会 印象記

志村 紀子
Shimura Noriko

日本薬学会第 133 年会が 3 月 27～30 日の会期で横浜市にあるパシフィコ横浜で開催された。

第 133 年会のテーマは「薬科学の底力」“Amazing Potential of Pharmaceutical Sciences: From Basics to Clinics.”である。薬学部は 6 年制教育が導入され、多くの臨床薬学分野の研究者が薬学会活動に参加してきており、喜ばしいことであるが、その半面、まだまだ科学的な基盤が不十分と考えられ、基礎薬学分野の重要性を再認識しつつ、すべての薬学分野におけるサイエンスのレベルを世界的にすることがこの年会の目標に掲げられた。

放射線・核医学に関する研究発表は、物理系薬学-放射性医薬品の部門で口頭発表 10 題と放射化学の部門でポスター発表 35 題が発表された。シンポジウムも企画され、「福島原発事故後の復興に向けた今日までの進捗状況」と薬学会としては珍しいテーマで行われた。一方、ここ数年話題となっているバイオイメージング関係のシンポジウムもあり、その中では定番ともいえる PET/SPECT によるイメージングの話もあった。以上の発表等の中で印象的であったものを中心に報告する。

1. 一般演題

一般演題の口頭発表では、PET, SPECT イメージングプローブの開発に関する発表が多くを占めていたが、その他に放射線治療に対する腫瘍増殖反応の評価法、分子同時イメージングが可能な PET 開発に関する発表などがあった。



写真 1 みなとみらい駅直結クイーンズスクエアからクイーンズパークを臨む

特にこの分子同時イメージングは、異なる陽電子放出核種を人体に複数投与した場合、511 keV の γ 線同士を分別測定できないという欠点があるが、ポジトロンのみ放出する核種とポジトロン放出後脱励起 γ 線を放出する核種の γ 線を、プランナー PET に高純度 Ge 半導体検出器を融合した新規の装置を用いて同時検出を試みた研究であり印象的であった。今後の医薬品開発に大きく貢献することと思われる。

ポスター発表では従来からのイメージングを目的としたリガンド合成・標識法等に加え、放射性物質の生物学的半減期の推定、食品による内部被曝低減効果、放射線防護活性評価系の研究など放射線の人体への影響に関する研究や、水中ラドン濃度測定法、福島第一原子力発電所事故に由来する放射性降下物の測定、土壌の

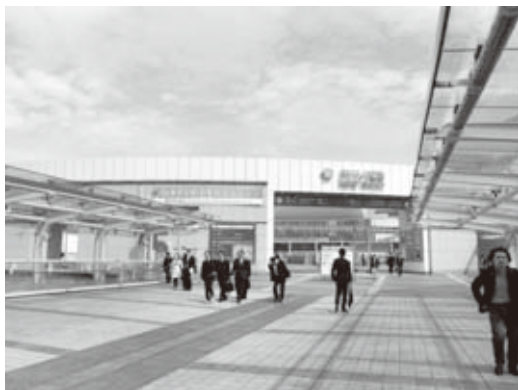


写真2 学会会場のパシフィコ横浜

^{14}C 測定など環境放射能測定に関する発表等、多岐にわたっていた。

口頭、ポスター発表共に活気にあふれ、特に学生などの若いパワーがみなぎっていた。留学生による英語の口頭発表では英語での活発な質疑応答があり、以前にも増して国際色豊かな雰囲気を感じられた。

2. シンポジウム「福島原発事故後の復興に向けた今日までの進捗状況」

このシンポジウムでは、医療を担う薬剤師や薬学研究者に復興のため何ができるか？ という問いを掛けることが主旨であった。健康リスクのアセスメントとコントロールに関する話題、陸域での放射性物質の環境動態に関する話題、海洋での放射能汚染の推移など、薬学会ではあまり紹介されたことのない内容の話が多く、興味深かった。特に印象に残ったのは、気象研究所の青山道夫氏の話で海洋における放射性物質の動きに関するものであった。事故前から行われていた海洋環境における人工放射性物質の挙動の研究成果の紹介とともに、事故起源の放射性セシウムが事故後約1年で北緯40度付近の日付変更線近くまで移動しており、その東向き速度が8 cm/sであったこと、冬期には水が沈むため、深いところに放射性セシウムが分布していることなど、初めて聞く話ばかりで新鮮であった。学会最終日の土曜日の午後の最終セッションで、主催者側としては参加者が集

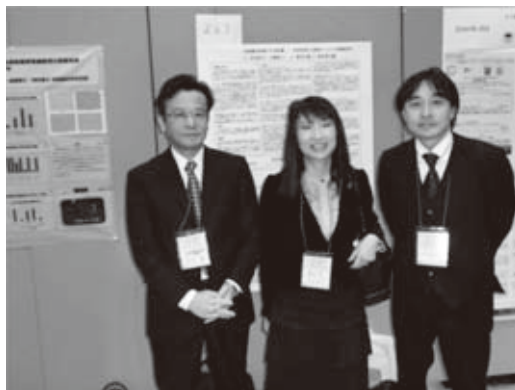


写真3 ポスター会場にて、左より佐々木徹先生（東京都健康長寿医療センター研究所）、筆者、加藤真介先生（横浜薬科大学）

まるかどうか（遠方の学会員は最終日の午後は帰路につくことが多い）心配していたとのことであるが、その心配は全くなく、大盛況であった。会場は座る場所もなく立ち見の人であふれ、医学薬学分野以外のシンポジストを招いての本企画は大成功であったと感じられた。また、それと同時に、福島第一原発の事故に関しては、いまだ根強い不安と関心が学会員の中にもあるのだと実感した。

*

今年は3月に入ってから暖かい陽気となり、東京近辺での桜の開花が早かった。会場最寄りの地下鉄みなとみらい駅から地上に出ると、桜が満開に咲いている港の風景が目の前に広がっていた。会期中はあいにく曇り空が続き小雨もばらついて少々寒々しい天気ではあったが、そのおかげか桜もずっと見ごろのままであった。会場付近は観光スポットが多く、春休みの家族連れの姿が数多く見られ、辺りはとても賑やかであった。この3月からみなとみらい線は、東武東上線・西武池袋線との相互直通運転となり、埼玉県から乗り換えなしで横浜方面まで来られるようになり、観光客もずいぶん増えていたとのことである。土曜の午後は、野外コンサートなどのイベントが行われ、楽しい観光客であふれる横浜での学会であった。

（奥羽大学薬学部）